

横山ゆずり作 「比較」

<前編>

(効果音) (玄関のドアを開ける音。)

村山みちる ただいま。

(効果音) (団らん。テレビ音。家族の笑い声。)

みちる (大きな声で)ただいま!

父 あ、みちるか。お帰り。おなかすいただろ。ご飯は?

みちる ん、いい。塾行く前にちゃんと食べたから。

妹洋子 お姉ちゃん、プリンあるよ。お父さんのお土産。

みちる 今いい。宿題たくさんあるから。すぐやっちゃわないと…。

洋子 いいの? お父さん、お姉ちゃんプリン要らないって。洋子がもらっていていいでしょ? やったあ!

父 洋子、テレビ少し小さくしなさい。みちるの勉強の邪魔だろう。

洋子 えー、今ちょうどいいところなのに。大丈夫だよ、お姉ちゃん? テレビの音なんか、勉強に集中してれば気になんないって。どんな環境でも勉強できるのが、一人前の受験生ってもんだよね。

父 洋子のやつ、勝手なこと言って。自分がテレビ見たいんだろ。

洋子 バレてたか。だってさあ…。

みちる はいはい、好きにして。

みちるナレーション わたしは村山みちる。青春中学の3年生。来年の高校受験に備えて、週に3日は塾通い。まあ、勉強は嫌いじゃないから、別にいいけど。それにどうしても入りたい高校もあるし。そうそう、さっきのあのにぎやかな子が、1つ下の妹の洋子。いつもあんな調子で、言いたい放題っていう感じ。あんなにズケズケ好きなこと言えたら、気持ちいいだろうなと思うときもあるけど、わたしにはマネできないな。—おっと、こんなこと考えてる暇ないんだ。宿題宿題っと。

(効果音) (間)(みちるの部屋のドアをノックする音。)

洋子 お姉ちゃん。

みちる なあに、洋ちゃん。

洋子 なんだ、まだ勉強中か。

みちる いいよ別に。どしたの?

洋子 あのさ、テニス部の前田先輩って、お姉ちゃん、同じクラスだよ?

みちる 前田先輩? ああ、前田敏明ね。うちのクラスも何も、わたし、席隣だけど。前田君がどうしたの?

洋子 えー、いいなあ、お姉ちゃんは。前田先輩って、2年の女子にすごい人気あるん

だよ。テニスはうまいし、カッコいいし、面白いし。今日の部活の時、わたし、いっぱい教えてもらっちゃった。そしたら、あとで 3 年の女子の先輩たちから、冷たい目で見られちゃったんだよ。

みちる

へえ、そんなに人気あるんだ。

洋子

うん。それできあ、お姉ちゃんに頼みがあるんだけどなあ。

みちる

何よ、もったいぶっちゃって。

洋子

あのさ、前田先輩の写真、欲しいんだ。

みちる

写真？

洋子

そう。なるべくアップで写ってるやつ。ねえ、同じクラスならあるでしょ。修学旅行のとか、遠足の時のとか。

みちる

何言ってんのよ。ないわよ。

洋子

ウソー。探してみてよ。もしなかったら、今度教室で写してきてよ。

みちる

バカなこと言わないでよ。そんなことできるわけないでしょ。

洋子

いいじゃん。ねえいいじゃん。お姉ちゃんお願い！

みちる

ダメったらダメ！

洋子

けち！ 何でダメなの？ あ、もしかして、お姉ちゃんも先輩のこと好きなんでしょう。だからわざと意地悪してるんだ。

みちる

な、何よ。いいかげんなこと言わないで。何でわたしが前田君のこと好きにならなきゃいけないわけ？ 冗談じゃないわよ。

洋子

なあんだ、違うの？ ならいいじゃん、写真。ね、もらってきて。絶対だよ、約束したからね。

(効果音)

(バタンと洋子が出ていくドアの音。)

ナレーション

正直言って、ドキッとした。わたしが前田君を好きだってこと、凶星だった。あの子、昔から変に勘が鋭くて、よくびっくりさせられたけど、今日のはほんとに焦った。それにしても、前田君がそんなに人気あるなんて、ちょっとショックだった。次の日、学校で。

生徒たち

(口々に)おはよう。／おはよう。／おっす。／宿題やった？／全然。

前田敏明

おっす！

みちる

あ、前田君、おはよう。

前田

あ、そうだ、村山。お前に聞こうと思ってたんだ。テニス部の 2 年の村山洋子って、もしかしてお前の妹？

みちる

うん、そうだけど。何で？

前田

あの子、面白いな、すごく。

みちる

洋子が？

前田

うん、めちゃくちゃ明るいもんな、洋子ちゃん。それにまた、時々大ボケかましてくれるんだよなあ、これが。疲れてるときなんか、あの子の笑い声聞くと、ほっと

するもん。家でもあなの？

みちる うん、まあ静かにしてるっていうことはないかな。いつも何かしゃべってるよ。

前田 へえ。あんな妹がいたら、退屈しないよな。明るくて、面白くて、いい子だもんな。

ナレーション お前ら2人って、^{きょうだい}姉妹でも見事に性格違うよな。

ナレーション 「それどういう意味よ」って、軽く言い返せる気分じゃなかった。洋子が明るくて、面白くて、いい子で、わたしがその反対？ じゃあわたしは暗くて、つまなくて、イヤな子なの？ うん、前田君はそんなつもりで言ったんじゃない。ただ、ずいぶん正確の違う姉妹だなんて言っただけ。分かってるよ、頭では。でも何かイヤ。すごく惨め。洋子と比べたら、わたしは確かに目立たなくて地味な子だもんな。そう、小さいころからずっとそうだった。わたしはいつも「おとなしくてお行儀のよいお姉ちゃん」で、洋子は「お茶目でかわいい妹」。何をしてもみんなの注目を集めてしまう子。あの時もそうだった…。

(効果音) (回想。BGM。)

ナレーション あれは小学生のころ、ちょうど父の日で、洋子とわたしはそれぞれお小遣いで買えるお父さんへのプレゼントを一生懸命考えていたっけ。

みちる(小学生) はい、お父さん、プレゼント。

父 ほう、何だろうな。

(効果音) (紙包みを開ける音。)

父 やあ、これはいい茶飲み茶わんだ。

みちる お父さん、お茶好きでしょ。だからそれにしたの。

父 ありがとう、みちる。

洋子 お父さん、洋子のも見てえ。はい。お姉ちゃんとたまたま同じのになっちゃって、つまない。でも洋子のは、ちょっと特別なんだ。

父 なんだ、洋子も茶わんか。

(効果音) (包みを開けながら。)

父 ほほう。これはいい。母さん、ちょっと来てごらん。洋子がこんなにしゃれた^{めおと}夫婦茶わんをくれたよ。なあ、これで飲んだら、お茶の味もぐんとおいしくなるぞ、なあ母さん。だけどこりゃ、ずいぶん高かったんじゃないか？

洋子 えへへ。まあね。お父さんのために奮発したんだよ。お年玉の貯金もなくなっちゃった。だから、お小遣いアップ、お願いね。

母 まあ。ちゃっかりしてるんだから、洋ちゃんは。

洋子 気にしない、気にしない。どう、今日は。洋子のアイデアの勝利だったでしょ？

母 お父さん、急に「お茶わん大臣」になっちゃったわね。

父 ああ。それじゃ早速、明日から新しい茶わんを使わせてもらおうかな。そうだ、洋子の夫婦茶わんをうちで使って、みちるのは会社用にしよう。

母 そうね、それがいいわ。

(回想終わる。)

ナレーション 父と母はそう言ってくれたけど、わたしの気持ちは晴れなかった。洋子の言葉どおり、明らかに妹のプレゼントのほうが、気が利いてセンスがよかった。何よりも、妹の茶わんを見たときの父のうれしそうな表情が、はっきりとそれを物語っていた。わたしは敗北感で涙がこぼれそうなのを、必死でこらえていた。できるなら、自分のあげた茶わんを父の手から奪い、たたき割ってしまいたい気分だった。でも気の弱いわたしは、もちろんそんなことができるはずもなく、ただうつむいているだけだった。

みちるモノローグ もしかしたら、あの時からわたしは、ずっと洋子に負けないように、負けないようにと思っていたのかもしれない。洋子がわがままを言っても許してきたのも、姉として余裕のあるところを見せたかったからかも…。わたし、わたし、本当は妹のこと憎んでる？ ううん、そんなことない。自分の妹を憎むなんて！ わたしはそんな冷たい人間じゃない！ でも… でも前田君のことだけはイヤ。絶対に洋子に負けたくないよ。

(効果音) (回想。エコー)

前田 洋子ちゃん手、明るくて、面白くて、いい子だよな。

みちるモノローグ やめて！ 前田君を取らないでよ、洋子。昔から、あんたには、欲しいって言うものは何でも譲ってきたじゃない。オモチャだって、見たいテレビだって。おばあちゃんが、おそろいの浴衣を買ってくれた時も、洋子が「ピンクのほうが欲しい」って言うから、わたしは我慢したんだよ。でも今度だけは許せない。わたしより洋子のほうが、前田君と仲良くなるなんて、絶対に許せない！ 洋子なんて、洋子なんて、いなくなっちゃえばいいんだ！

(効果音) (玄関を開ける音。)

みちる ただいま。

母 (慌てて) あ、みちる、待ってたのよ。お母さん、今から病院に行ってくるから、うちのほう頼んだわね。

みちる 病院？ どうしたの、お母さん？ 具合が悪いの？

母 洋ちゃんがね、ケガしちゃったのよ。部活の時らしいけど。

みちる え、洋子が？ ケガ？ 新人戦に出るって、あんなに頑張ってたのに…。

ナレーション さっきまで心の中で思っていた洋子への憎しみの後ろめたさも入り混じって、わたしはじっと唇をかんでいた。

<後編>

みちる え、洋子がケガ？

(効果音) (ショッキングな音楽。)

ナレーション わたしは村山みちる。青春中学の3年生。両親と、1つ年下の妹、洋子との4

人家族。妹は、わたしと正反対の性格とよく言われる。言いたいことはハキハキ言うし、人に甘えるのも上手で、わたしから見るとずいぶん“得な”性格。それにしても、親なんて、自分で産んでおいて、勝手なものだとつくづく思う。だって、小さいころから、「お行儀よく」「お利巧に」「人に迷惑かけないで」って教えられて、期待にこたえようと一生懸命努力してるのに、母親は「この子は消極的で」なんて言うし。大人の言うことなんかお構いなしの、型破りな洋子見たいな子を、父も「個性的で面白い」ってチャホヤするんだから。洋子はかわいい妹だけど、時々憎らしくなる。一緒にいると、何だか自分が引き立て役みたいで、惨めな気持ちになる。特に許せないのは、前から気になっていたクラスの前田君に近づこうとしていること。悔しいことに、前田君も洋子のことをテニス部の後輩として、かわいがっていることだ。この間も…。

(効果音)

(回想。エコー。)

前田

お前の妹って、面白いよな。あんな妹がいたらいいなあ。明るくて、いい子だもんな。同じ姉妹でも、性格違うよな。

ナレーション

悔しかった。前田君のあの言葉を聞いた時、わたしの心の中に、洋子に対する競争心と憎しみとが広がっていった。前田君を取られるくらいなら、洋子なんていなくなればいい、そんなことまで思った。そうしたら、洋子が本当にケガをしてしまったのだ。わたしは改めて、自分の心の冷たさを思い知らされ、二重のショックを受けていた。わたしは、何とか自分の気持ちを伝えようと、毎日妹を見舞ったが、素直に切り出せずにはいた。そんなある日、“今日こそは”と思いつつ病院に行くと、10人近いクラスメートの先客がいて、洋子の病室はにぎやかだった。

(効果音)

(病室をノックする音。)

洋子

はい、どうぞ。

(効果音)

(ドアの開く音。続いて10人くらいの、にぎやかな話し声。)

洋子のクラスメート

ほんと、びっくりしたけど、元気そうじゃん。／いいなあ、練習休めて。／あたしも入院って、一度してみたい。／パーカ、何言ってんだよ。／テレビないの？

洋子

あ、お姉ちゃん、ヤッホー。

洋子のクラスメート

お姉さん、こんにちは。／お邪魔してます。(など口々に。)

みちる

(みんなに)あ、どうも。(洋子に)ヤッホーじゃないわよ。ケガ人なんだから、おとなしくしてなくちゃダメでしょ。

洋子

だってえ、退屈で死にそうなんだもん。放課後、だれかお見舞いに来てくれるのだけが生きがいだよ。

みちる

ちょっとオーバーじゃないの？

洋子

いいじゃん、ケガ人なんだから。今日だって、テニス部のみんなが来てくれて、生き返った感じ。ああ早く治って部活にでたいよお。

クラスメートA でもラッキー、洋子は。だってケガしたから、前田先輩にお見舞いに来てもらえたじゃん。

クラスメートB ほんとほんと。ああ、あたしもわざと転んじゃおうかなあ。そしたら先輩が…。

クラスメートA バカ。お前が転んでもかわいくねえよ。

洋子 お姉ちゃん。前田先輩、さっきまでいてくれたんだよ。このテニスボール型のチョコ、お見舞いにもらったの。あのね、「ケガしたくらいで、テニスを嫌いになるなよ」だって。

クラスメートB カッコいいよね、言うことまで。

洋子 今日は塾があるからって、先に帰ったの。残念だったね、お姉ちゃん。

みちる 別に残念じゃないわよ。学校で毎日会ってるんだから。

クラスメートA えー、お姉さん、前田先輩と同じクラスなんですか？

クラスメートB うらやましい。今度サインもらってきてくれませんか？

クラスメートA やめなさいよ、バカね。

クラスメートB だってえ。

ナレーション 前田君が洋子のお見舞いに来た。前田君が洋子のためだけに、お見舞いの品を選んだ…。そう思っただけで、わたしの心は煮え繰り返るようだった。冷静に考えようとしても、そのたびに洋子の得意そうな顔が浮かび、わたしの心をいらだたせた。

母 みちるちゃん、ご苦労様。洋ちゃんの様子、どうだった？

みちる うん、相変わらずピンピンしてたよ。テニス部の子たちが大勢来てくれてた。

母 あら、今日も？ おとといも部活の帰りによってくれたばかりなのよ。昨日はクラスのお友達が来てくれたし、何だかんだ言っても、あの子、友達が多いのね。

みちる …。

母 あら、その荷物は？

みちる 洋子から頼まれたの。お見舞いにもらった物だって。お花と、本と、これはお菓子かな。あとビデオ。病院じゃ見られないから、退院してから見るって。

母 そう。ずいぶんいろいろ頂いたのね。大きな花束。このお菓子は、洋子が帰ってくる前に開けたら、あの子、きっと怒るわね。あと、このビデオはどなたに頂いたのかしら。

みちる あ、それ、借りたんだって。小学校の時、洋ちゃんのことを時々教会のクリスマスに連れてってくれた友達がいたでしょ。えっと、何とか牧ちゃんって子。その子が貸してくれたらしいよ。お母さん、そのビデオ、知ってるの？ 映画の？

母 あ、映画じゃなくてね。このレーナ・マリアって、確かクリスチャンの歌手よ。テレビで何回か紹介されたのを見たことがあるわ。体が不自由なんだけど、とってもすばらしい歌を歌う人よ。みちるちゃんもあとで見てごらんなさいよ。

みちる ふーん。

ナレーション その日の夕食も、何だかしんとしてお通夜のようなようだった。洋子が入院してから、ずっとこんな調子だ。

(効果音) (食卓。ハシ、食器の触れ合う音など。以下、会話の間中続く。)

父 みちる、どうだ、勉強のほうは?

みちる まあまあ。

父 第1希望のところ、ねえそうか?

みちる 多分ね。

父 しかし何だな。洋子がいないと、こんなにも静かなものとはな。

母 そうですね。日ごろから、にぎやかな子だとは思ってましたけど、いないと寂しいもんですね。

父 まるで灯が消えたような感じがするもんだなあ。

みちる …ごちそう様。

母 あら、もういいの?

ナレーション わたしは、返事もしないで自分の部屋へ戻った。

みちるモノローグ (深いため息)お父さんの言ったとおりだ。洋子がいないと、まるで灯が消えたみたい。わたしがいても、この家はちっとも明るくならない。わたしじゃ、お父さんやお母さんの気持ちを慰めて、明るくしてあげることもできない。どうして? どうしてわたしじゃダメなの? わたしだって、この家の子なのに。洋子がいなくなっちゃえばいいって思ってたけど、いなくなると、いるときよりも、もっと存在の大きさを思い知らされてる。結局、どうやってもわたしは、あの子にはかなわないんだ。わたしには、洋子の半分も人を引き付ける力がない。

ナレーション 本当に寂しい夜だった。じっとしていると、無力感に押しつぶされそうだった。何かに慰められたい、と切実に思った。その時、ふと思ひ浮かんだのは、昼間、洋子のところから預かってきたビデオのことだった。母が“すばらしい歌”といっていたレーナ・マリアという人のビデオ。こんな気持ちのときは、かえって意味の分からない英語の歌詞のほうが、気が楽だとも思った。

(効果音) (ガシャットビデオをセットする音。)

(BGM) (レーナ・マリアの日本語の歌)

みちる 予想に反して、1曲目は日本語の歌だった。そして、もっとわたしを驚かせたのは、歌う彼女の姿だった。

みちるモノローグ この人、両腕がない。お母さんが、「体が不自由だ」と言ってたけど、まさか腕のない人だったなんて。

ナレーション わたしは、いつしか食い入るようにビデオの画面に見入っていた。彼女、レーナ・マリア・ヨハンソンは、若いスウェーデンのゴスペルシンガーだった。生まれつき両腕がなく、その上、片足が短いという障害を負っていた。けれども彼女の生活ぶりは、健常者も及ばないほどエネルギーで、生き生きしていた。

パラリンピック(障害者のオリンピック)に出場するほどに上達した水泳。お料理から編み物、パソコン、それに車の運転まで、手の代わりに何でもこなす彼女の足。わたしは圧倒される思いだった。「わたしは障害者とは思ってないのです。神様のつくるものに、失敗作はありません。わたしたちは一人一人が、神様のパーフェクトな作品なのです。わたしも、あなたも。」…。

みちるモノローグ

だれもが、神様のパーフェクトな作品…。そんなこと、考えたこともなかった。わたしは、いつも自分のイヤなところばかり気になって…。妹と比べられるのがイヤなくせに、いつも心の中では洋子と張り合っていた。でもこの人は違う。自分のありのままの姿を受け入れて、喜んでいる。どうして感謝できるの？愛… そうだ、さっき、「神様に愛されてる」って言った。神様に愛されると、あんなに輝いていられるのかな…。

ナレーション

その時、わたしは、洋子の友達の牧ちゃんって子に、もっと神様のことを聞いてみたいと思った。その前に、今度こそ洋子に、正直に謝ろう。黙ってても分からないことだけど、そうしないと、本当の自分になれないような気がする。「洋子は洋子、わたしはわたし。ありのまままでいられたら、あのレーナさんのようになれるのかもしれない。」そう思いながら、わたしは、洋子のにぎやかな笑い顔を思い浮かべていた。

(完)